

第3回三次市行財政改革推進審議委員会 委員発言要旨

日 時：平成31年2月5日（火）14時～16時

会 場：三次市役所本館3階会議室

出席委員：橋本会長，堀江副会長，平岡委員，町野委員，岸田委員，小川委員

安藤委員，藤田委員，村山委員，早川委員

欠席委員：富野井委員，新宅委員，法林委員

○ 次期三次市行財政改革大綱について

- ・市が第2次三次市総合計画の中間見直し（改訂）をしたが，抜本的な改訂はしていない。次期大綱も，基本的には現大綱をベースに策定する考えである。（会長補足説明）
- ・学校給食調理場を再編して給食センターを整備する計画について，行財政改革の名の下で効率化や民間委託を進めており，子どもや保護者などを置き去りにしているのではないか。【問題提起】（行政と関係者が同じ方向を向いて進んでいない。）
- ・「右か左か」ではなく，どこで折り合いをつけていくかが，行財政改革で掲げる「対話」である。行政と市民が「向き合う」のではなく，「寄り添う」形の対話ができたら良い。
- ・これまで「受け身の対話」「攻撃的な対話」が多かったのではないか。次期大綱では，本当に三次の未来を考えて市民と行政お互いが役割分担し，未来に向けて同じ目的に向かって進んでいきたい。
- ・対峙する形ではなく，同じ方向を向いて問題解決型で議論を進める必要がある。どうすれば一番みんなが納得できるか。それができるようになれば，協働の雰囲気になり，みんながやる気になる。その雰囲気づくり，土壌づくりが必要。風土はだんだんできてきている。
- ・「対話のあり方」を考えていく必要がある。テニスとゴルフを例にすると，テニスは，対峙して相手とやりあって会話が少ない。ゴルフは，同じ方向を向いて進み，会話もある。「ゴルフ方式」で方向性を一緒にしていくべき。
- ・「ゴルフ型対話」は分かりやすい。「市民と行政の共同解決型の対話」も良いのではないか。
- ・それぞれ色々な思いがある。対立するのは接点がなくなってきたからかもしれない。対話をもっと深くやるべき。「質の改革」の部分であり，その辺りの認識は大綱に盛り込まれている。
- ・取組や目的を考える部門とコストを考える部門は別であるべきで，全員がそろばんをはじいてはいけない。（給食センターの例では，教育委員会自体が効率化ありきで教育（食育）を考えてはいけない。）
- ・三次市外から入ってくる人の刺激も取り入れていくべき。「人づくり」につながる。皆さんの対話からいろいろなことを感じて，よりよい大綱にしていきたい。
- ・協働のまちづくりは，対峙ではなく対話すること。特色あるまちづくりは，自分たちの地域を自分たちで守らなければならないという思いで行われている。行政と各地域の住民との意思疎通が十分図れるようなまちづくりができればいい。

- ・甲奴地域では外国人への対応がうまくできている。これが市内全域に広がれば良い。
- ・いろいろなハコモノができたが、「アシスタ lab.」や「ネウボラみよし」など、子育て、女性の支援も進んだ。うまく活用できているかという部分はあるが、良い取組をしているので、みんなにしっかり知ってもらいたい。
- ・正月に「家族全員が集まって大変だった」という話を知り合いにしたら、「贅沢な（幸せな）話だ」と言われた。現実として、子どもの貧困、親子の会話や十分な食事ができていない子どもがいる。なかなか実態が分からないことが多い。
- ・文章に「求められている」という表現が多い。「誰が求めているのか」という話になる。自発的に何かをこうしたいとかいう意思表示が必要ではないか。
- ・大綱の内容の分かりやすさは必要であるが、ある程度の堅さも必要。分かりやすい言葉で書くと、逆に分かりづらくなる。やらされるより、自発的・前向きになると良い。
- ・「こうありたい」という想いは大切。それがないと課題が見えない。
- ・成果の強調だけではなく、できなかったことや課題をはっきりさせる必要がある。課題を共有するということが大切である。
- ・目先の節約のために予算を削って、中途半端なものにしてはいけない。きちんと完成させてこそ、未来の三次が誇れる力になる。
- ・「フットワークの良い」組織も大切であるが、災害復旧対応など、「スピード感」も必要である。
- ・中国山地の地域の中で、三次市がつまずいたら、地域全体に影響する。守りに入るのではなく、行財政改革であったり地域づくりであったり、より良いものが生まれてくる三次になってほしい。